

和歌山県立文書館紀要

第 21 号

- 地域のなかの「偉人」顕彰
—「勤王の志士」森田節斎をめぐる地域の人びと—
.....平良 聡弘 (1)
- 新宮市熊野川町九重の被災遺物「湊水之器」
及び記念石碑について藤 隆宏 (31)
- 史料翻刻
田辺藩庁文書「無官士族卒名前」砂川 佳子 (45)
- 「附込帳」にみる大奥女中の役替えについて その6
.....松島 由佳 (75)

平成 3 1 年 3 月

和歌山県立文書館

史料翻刻

田辺藩庁文書「無官士族卒名前」

砂 川 佳 子

昨年度の紀要において、当館で所蔵する『紀州家中系譜並に親類書書上げ』のうち、紀州藩付家老安藤家臣団の「先祖書」を取上げ、紹介した。^①その後、改めて当館の史料を探索したところ、安藤家臣団を書き上げた帳面を四点発見することができた。そこで本稿では、そのうちの一点「無官士族卒名前」を翻刻し、若干の解説を付しておくものである。

まず、この度発見した四点の史料、すなわち「若山江戸御附職分録」、「無官士族卒名前」、「独礼順書」、「卒族順書」について触れておこう。いずれも当館開館時に県立図書館から移管されてきたもので、収蔵史料目録四『移管資料目録』において既に公開している。^②しかしながら、この四点の史料は目録上「紀州藩・和歌山藩庁」に分類

されてしまっていた。

ところが、今回改めて精査したところ、田辺藩によって作成されたものであることが判明したことから、誤りを正し広く利用に供するため、翻刻をおこなうこととした。ただし、これらを一度に翻刻すると大部になることから、順次発表していく予定である。

以下、資料番号順に概要を示しておく。

「若山江戸御附職分録」(写真1、資料番号八九八六)

一点目は、「若山江戸御附職分録」で、表題通り、和歌山の安藤家当主付と江戸屋敷付の家臣、それに歩兵を加えた一八七名を記したものであるが、京都御留守居など、和歌山・江戸以外の役職についても含まれている。



写真1 「若山江戸御附職分録」
(資料番号 8986)

安藤家は、紀州藩付家老という藩主を補佐する立場にあったことから、当主は和歌山に居住していた。そのため本領である田辺の地は、安藤小兵衛家が城代をつとめ支配していた。安藤家は付家老という特殊な地位により、陪臣でありながら譜代大名並みの扱いを受け、江戸に邸宅を与えられていたため、江戸にも家臣の一部が常駐していた。⁽³⁾

ここでは、役職名に付家老時代のものが用いられていることから、遅くとも田辺藩職制が定められた明治二年

(一八六九)九月までに作成されたものである、といえる。「若山江戸御附職分録」で注目すべきは、「御預り同心」六〇名の書上である。安藤家では、与力三六家のほか同心六〇名を紀州藩から預かっていた。与力らは、幕末に安藤家家臣に組み入れられることになり、一部の与力がいわゆる「田辺与力騒動」を起すが、和歌山城下に居住していた同心たちは安藤家家臣団とされることなく、明治二年十月、紀州藩に戻されている。⁽⁴⁾ここに記された六〇名は、おそらく最後の預り同心たちであろう。

「無官士族卒名前」(写真2、資料番号九〇〇六)

二点目の「無官士族卒名前」を本稿では翻刻した。

「無官士族卒名前」は、明治四年(一八七二)三月^{すい}民局^{みんきょく}什伍懸りによつて作成された横帳で、士族一七七名、卒族一六〇名、計三三七名分の名字、諱^{いみな}、諱のふりがな、通称が、また士族の一部の人物には「兵」・「邸」・「校」とも記されている。

表題に「無官」とあるように、当時田辺藩の役職に就いていなかった家臣団らの名簿である。作成者の綏民局

というのは、田辺城二ノ丸内にあった田辺藩庁の部局の一つで、民政を担当した（表1）。

今回翻刻するにあたってこの史料を選んだ理由は、国立公文書館で所蔵される『和歌山県史料』のうち、田辺藩史附録の官員履歴（以下、「田辺藩官員履歴」とする）と併せてみることによって、明治四年頃における卒以上の家臣団が明らかとなるからである。

田辺藩では、政府の指導よりも早い明治二年八月に藩政改革を実行、家臣団を上士、中士、下士、卒、小者に分類し整理した。

『和歌山県史料』のうち、「田辺藩史」によると、明治二年の士族は六七七名、卒族五八〇名、小者二二二名と、合せて一、四六九名もの人員を抱えていたことが記されている（表2）。翌三年（一八七〇）、藩政改革をおこなったが、むしろ士族が百名以上、卒族三〇名ばかり増え、計一、六一五名と一五〇名近く増加した。

ところが、翌年の明治四年には、士族二七九名、卒族二七三名、官員一三三名の計六八五名と前年の半分以上に減じている。つまり明治三年十一月の集計以降、緩民

局の廃止される明治四年四月までの四ヶ月の間に、大幅な人員削減がなされたのである。

「無官士族卒名前」には、「田辺藩官員履歴」と突き合わせると、重複して記載される人物が三〇名おり、この間に免官されたことが確認できる人物が二七名存在する。

田辺藩では、兵制として楊烈隊、底綏隊、彰信隊、明義隊、壯毅隊という歩兵五小隊二五〇人と、土工兵一小隊（人数不明）、砲兵二分隊五〇人を健剛



写真2 「無官士族卒名前」（資料番号 9006）

表1 田辺藩（県）年表

年	月	日	全体・紀州藩の出来事	月	日	田辺藩の動き
慶応3 (1867)	10	14	大政奉還			
慶応4	1	3	鳥羽伏見の戦い			
明治1 (1868)	1	24	朝廷、御三家の付家老五家を大名に取り立てる	1	24	田辺藩成立するも紀州藩政に参画を続ける
	7	14	「御三家」の称を廃止する			
	9	20	津田出、執政となる	8	26	紀州藩政への参与を禁止される
明治2 (1869)	3	28	東京奠都	2	20	安藤直裕、田辺へ帰藩
	6	17	版籍奉還が勅許され、藩知事を任命	6	20	安藤直裕、版籍奉還を願い出、藩知事に任じられる
	6	25	藩知事へ禄制改革を達す	7	－	田辺城二ノ丸に政治府（のち「藩庁」）を設置
	9	10	藩政改革を布告	8	25	藩政改革により、禄制と士卒の階級を改める
	12	－	士族・卒の称を定める	10	－	同心60名を和歌山藩に返還
明治3 (1870)	1	29	和歌山藩兵制改革	8	18	「経済局（会計司・緩民司に分課）」をおく
	7	17	和歌山城砂の丸に政治庁・諸局を建設	10	7	「経済局」を「会計局」と「緩民局」に分立する
明治4 (1871)	1	5	寺社領を上げ地	4	12	「緩民局」の称を廃止し、「某出庁」とする
	7	14	廃藩置県	7	14	田辺県成立、「藩庁」を「県庁」に改める
	11	22	府県統廃合	11	22	和歌山県に編入される（「元田辺県」として事務は継続）
明治5 (1872)	1	29	卒の身分を廃止	3	7	旧田辺県のうち土壌民人・図籍・田辺城を和歌山県へ引き渡す
	4	9	戸長・副戸長を設置	3	23	旧官員を罷免
	5	－	陸奥宗光「田租改正建議」を提出		27	「元田辺県」の称を廃止

表2 田辺藩人数変遷表

資料名	田辺藩史			無官士族卒名前	田辺藩官員履歴	計
	明治2年	明治3年	明治4年	明治4年3月頃	明治5年頃	
士族	677	788	279	177	159	312 (24) *
卒族	580	611	273	160	43	197 (6) *
小者	212	216	－	－	1	1
官員	－	－	133	－	－	－
ほか	－	－	－	－	9	9
計	1,469	1,615	685	337	212	519

*・・・カッコ内の数字は重複する人数
いずれも男の人数のみを採った

隊といい、少なくとも三〇〇人以上の藩士及び卒によって組織されていた。帳面のなかで「兵」と記されている人物が九名いるが、いずれも「田辺藩官員履歴」には名前が見えず、「兵」が具体的に何をあらわすのか、定かではない。

明治三年十月以降、歩兵五小隊のうち楊烈、底綏、壯毅の三小隊と土工兵、健剛隊が廃止されており、その結果、二〇〇人以上の武官が「無官」となったと考えられるよう。

兵制の改革は、明治初期における各藩の重要課題であり、新政府においても増強の一途をたどる各藩の軍備を規制するために布達が発せられたことから、ある程度の変遷を知ることができる。一方で、文官については高位の人物についてのみ、その異動が記されるばかりで、表1にあるように、部局の変更時に官吏の異動があったことも想像されるが、「田辺藩官員履歴」以外に知る術はない。

次に「校」の記載について、みておきたい。

田辺藩では当初「文武場」と称して学校を設立、士族

子弟への教育が始まった。明治二年九月の職制制定時に「修道館」と改められた。この時、皇学を熊代瑞穂、漢学が岡本黄中と浅井寛堂、洋学に鳥山啓^{ひづる}が教師として任命され、ほかにも助教などに複数が申付けられている。

「校」と記載のある人物のうち、翻刻史料より、史41林功だけが「田辺藩官員履歴」に載るが、壯毅隊、底綏隊の半隊長をつとめた履歴があるだけで、藩校に対してどのように関係したのかは詳らかでない。林の場合は半隊長という立場上、指導者として兼任していたのである。

「無官士族卒名前」には、文官に分類される人物もいたはずであり、文官となった可能性は低いと思われるものの、付家老時代に茶道役をつとめた士56羽山宗休の名が見える。⁵⁵ちなみに羽山には、「邸」と記されている。「邸」とは、田辺藩の長屋等ではなく、個別に邸を構えていたことを表している。というのも、羽山家は和歌山城下住まいで、自邸において罪人の処分を申し渡していたことが判明しており、ほかの人々についても和歌山県立図書館で所蔵する『旧和歌山藩士族名簿』⁶⁾と照合することで、

居住地を明らかにすることが可能である。また、士口の中島衛守は、「邸」と記されていないが、『旧和歌山藩士族名簿』によると、住吉町（現和歌山市住吉町）に居住していたとされる。田辺藩士たちの居場所を明らかにすることで、幕末から明治に渡る和歌山の都市空間を復元する一助となろう。

次の「独礼順書」には、無役を含めた役職ごとに氏名が記されていることから、今後詳細な分析を加えることで、文官たちの異動について、多少なりとも明らかにすることができるのではないかと考えている。

「独礼順書」（写真3、資料番号九〇〇七）

三点目の「独礼順書」は、その表題からすると田辺藩知事である安藤直裕と御目見えする際の順序を書き記したものである。

内容は大半事をつとめた安藤小平を筆頭（兵衛）に、藩役に就いていた上士の氏名がまず記載され、



写真3 「独礼順書」（資料番号 9007）



写真4 「卒族順書」（資料番号 9008）

次に無役の上士の氏名、中士・下士の役職持ち、無役の中士、下士組頭のあと無役の下士、会計属、算驗属などを挟んで、上卒組頭、上卒、隊の兵卒、書記、捕亡手、下卒組頭、下卒と計六五七名の役職と格式、氏名が記されている。

帳面に作成された年月日の記載はないが、「田辺藩官員履歴」と対照すると、明治三年頃と推定される。あるいは次の「卒族順書」と表題が共通することから、同時期の作成も考えられよう。

「卒族順書」(写真4、資料番号九〇〇八)

四点目は、「卒族順書」である。明治三年二月の作成になる。さきほど卒族にも上卒・兵卒・下卒に分かれていたことをみたが、この帳面内では特に分類もされておらず、ただ卒族に属した人々の氏名が三一七人分書き連ねられている。「無官士族卒名前」とは、人物名や並び順が異なるが、いかほどの相違があるのかなど、詳しい分析は後日を期したい。

以上四点が、収蔵史料目録四『移管資料目録』で「紀州藩・和歌山藩庁」に分類されていたものである。もう一点、田辺藩で作成された帳面類があるので、併せて紹介しておきたい。

「御管内綏民局等級人員」(写真5、資料番号九〇二四)

同じく当館収蔵史料目録四『移管資料目録』の「御管内綏民局等級人員」である。これは、裏表紙に「田辺藩綏民本局」との記述から、田辺藩として目録に項目が立てられている。表紙には「庚午(明治三年)閏十月」とあるが、田辺にいた町吏の氏名を書き上げた箇所で、「明治四年八月十日 今福町吏 山本安平」の付紙が見られることから、明治三年以降も手が加えられていたことが明らかである。

内容は、明治三年十月七日に設置された綏民局配下の人員について、等級・役職別に氏名が記載されたものである。役職には「貧院掛り」、「村長」、「病院掛り」、「町吏」、「末寺之向」、「邏卒」などがみられる。

さきほど紹介した四点に、元から田辺藩と分類していた一点を加えた計五点が、文書館で所蔵する田辺藩の藩庁文書である。

当初は筆者自身も館蔵品のうちに田辺藩庁文書が残存しているとは思っていないかったが、「御管内綏民局等級人員」と「無官士族卒名前」の様式が共通し

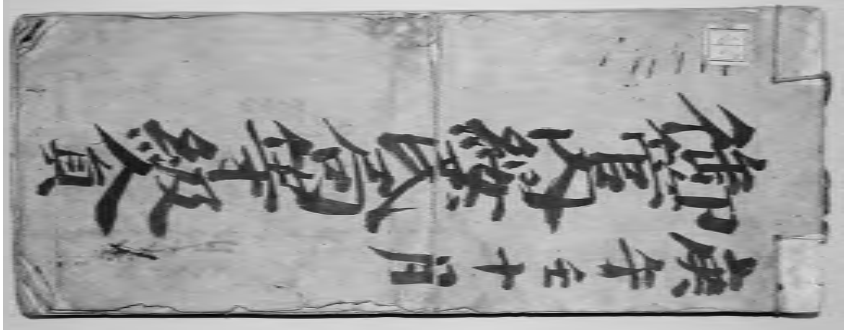


写真5 「御管内綏民局等級人員」（資料番号 9024）



写真6 上が「御管内綏民局等級人員」、下が「無官士族卒名前」

ていることに気が付いたことをきっかけに、同じような様式をもつ「若山江戸御附職分録」、「独礼順書」、「卒族順書」の三点も田辺藩庁文書であることが判明した。

五点に共通する最も特徴的な様式といえ、帳面本体が反故紙を貼り重ねて作られていることである。何枚重ねられているかはわからないものの、一丁が厚紙ほどの分厚さとなっている。反故紙には田辺藩の廃棄文書が用いられており、「無官士族卒名前」と「御管内綏民局等級人員」の二点において、その様子がよくわかる（写真6）。そのほかについては恐らく反故紙であることを隠すため、全体に墨塗りが施されている。

そのようにして作られた帳面に、禄高・格式・人名等を記した付箋状の細長い紙が、上下二ヶ所で糊付けされている。帳面本体には、紙を剥した形跡が認められることから、人事異動の際には付箋を張り替えて情報を更新していたのであろう。

これまで安藤家臣団については、『和歌山県史』および『田辺市史』で翻刻された「職分録」、『田辺市史』

による「田辺御家中年齡調」の紀州藩付家老時代に作成された二点を中心に用いられてきた。

しかし、今回再確認することとなった四点の史料によつて、これまでほとんど知られていなかった、長州征討出陣と軍備の強化に伴う下級家臣の肥大化と、田辺藩として独立し、その後の廃藩置県と府県統廃合による家臣団の整理や縮小の変遷を明らかにすることが可能となった。また、明治初期の田辺藩における地域支配をうかがい知ることのできる、貴重な史料を再発見することができたといえよう。

ところが、ほかにもまだ田辺藩庁文書が残されていることがわかった。一つは、文書館に移管されることなく、現在も県立図書館に所蔵される史料で（表3）、「田辺藩兵職掌氏名一覽」（県立図書館『郷土資料目録』資料番号九〇二二）である。もう一つは、国立公文書館で所蔵する『和歌山県史案』『旧田辺県小者廃禄ノ儀ニ付出訴ノ件』あるいは「公文別録」（請求番号 別〇〇〇三九一〇〇）に「和歌山県下旧田辺藩小者へ就産資金貸与ノ件」と題する旧田辺藩小者たち一〇九名によ

表3 県立図書館『郷土資料目録』にみえる田辺藩関係文書

資料番号	表題	所蔵	翻刻掲載
8986	若山江戸御附職分録	文書館	
9006	無官士族卒名前	文書館	本稿
9007	独礼順書	文書館	
9008	卒族順書	文書館	
9015	〔紀州藩重職并田辺新宮与力知行地沿革〕	県図書館	「新宮市史」
9021	〔安藤小兵衛家文書〕	県図書館	
9022	〔田辺藩兵職掌氏名一覧〕	県図書館	
9023	田辺領紀州家士諸覚	県図書館	「田辺市史」
9024	御管内綴民局等級人員	文書館	
9171	田辺諸事控	県図書館	

る訴状がある。

「田辺藩兵職掌氏名一覧」は、従七位以下の士卒らの氏名と役職などを具体的に知ることが可能であるし、「和歌山県下旧田辺藩小者へ就産資金貸与ノ件」では、今回の四点の史料でも恐らくほとんど出てこない、小者の氏名を明らかにすることができよう。

また、田辺市

立図書館で所蔵する安藤小兵衛家文書には、幕末から明治にかけて作成された多くの資料が伝わっている。今後、こうした残る史料の調査を進め、明治初期における田辺藩の動向解明に取り組んでいきたい。

註

- (1) 砂川佳子「資料紹介『紀州家中系譜並に親類書書上げ』における紀州藩付家老安藤家臣団の「先祖書」について」『和歌山県立文書館紀要』第二〇号 二〇一八年
- (2) 和歌山県立文書館 収蔵史料目録四『移管資料目録』「県立図書館移管資料」二〇〇〇年
- (3) 紀州藩と付家老安藤家については、小山譽城『徳川御三家付家老の研究』清文堂出版二〇〇六年 に詳しい
- (4) 国立公文書館所蔵『和歌山県史料』以下、特に註を記さない場合、同書中の「田辺藩史」「田辺県史」を参照した。
- (5) 砂川佳子「田辺安藤家御茶道羽山家の歴代について」『和歌山県立文書館紀要』第二〇号 二〇一八年
- (6) 徳義社編『旧和歌山藩士族名簿』和歌山県立図書館発行 一九七七年
- (7) 田辺市立図書館ホームページ
<http://www.city.tanabe.lg.jp/toshokomomijyo.html>

史料翻刻

「無官士族卒名前」

凡例

翻刻にあたっては一般的なルールに従っているため、
本稿で特に設定した点のみ、以下に記して置く。

名前の上の「士1」あるいは「卒1」というのは原本
に書かれていないが、解説文等において便宜を図るため、
番号を割り当てたことを御容赦いただきたい。

原本において朱字で書かれたものはゴシック体とし、
黒字とは区別している。

(表紙)

「明治四年

無官士族卒名前

(貼紙「第拾六号」)

辛未三月 綵民局 什伍懸り」

士1 彌太郎

校 小守

士2 彌三郎

下方平孝知タカトモ

士3 長枝

安藤藤原重壽シゲヒサ

士4 新一郎

志波橘孝久タカヨシ

士5 荒海

安藤藤原教義ノリヨシ

士6 与作

久野宗久ムネヒサ

士7 半七

大石邦定クニサダ

士8 文悟

喜多幡信堅ノツカタ

士9 晴

日吉則明ノリアキラ

士10 榮作

北村

中御門殿へ御貸

士11 衛守

中島忠明
タケアキラ

士12 渚

今井義制
ヨシナリ

士13 吉美

松井元邦
モトノリ

士14 榮

今井寛則
ヒロノリ

士15 喜三次

津村信實
ノブシゲ

士16 三郎

堀口貞國
サダノリ

士17 始

山口勝忠
カッタベ

士18 半蔵

石川重義
シロヨシ
(虫)

士19
彌
(虫)

芦田正知
アサノチ

中御門殿へ御貸

士20 諸人

江原親長
チカナガ

士21 芳郎

中松恭昌
ユキマサ

士22 房次郎

杉本重成
シゲナリ

士23 精吾

岡田正知
マサトモ

士24 守蔵

失部信義
シベヨシ
(マ)

士25 藤蔵

池永祇徳
アサノリ

士26 榎雄

榎井

士27 鈴音

宮所祥昌
ヨシマサ

士 28 繁次
 山本久重 ヒサシゲ
 士 29 宗次郎
 澤村吉重 ヨシシゲ
 士 30 秀太郎
 中村友長 トモナガ
 士 31 良平
 榎本恭近 ユキナガ
 士 32 初太良
 天野範景 ノリカケ
 士 33 政四郎
 久世田忠勝 タヘカツ
 士 34 明
 向日定重 サダシゲ
 士 35 鷹造
 校 落合
 士 36 岩五郎
 和布波正義 マサヨシ
 士 37 良三郎

士 38 準一郎
 小山義明 ヨシアキラ
 士 39 龍太郎
 校 脇本
 士 40 (空白)
 中原平内
 士 41 功
 校 林
 士 42 左海
 邸 津守
 士 43 隆平
 野口通孝 ミチタカ
 士 44 武膳
 工藤清慎 キヨチカ
 士 45 又雄
 野村勝敬 カツカタ
 士 46 惣内
 小守宜續 ヨシツグ

士 47 精一郎
 士 48 糺 速水恒清^{ツネキ}
 士 49 菊次郎 校 二村
 士 50 泉 校 三浦
 士 51 植夫 水島芳忠^{ヨシタケ}
 士 52 楠彌 廣田正健^{マサヨシ}
 士 53 段六 久保田敬勝^{ヨシカツ}
 士 54 龍瀧 田中惟起^{ヨシキ}
 士 55 精十郎 邸 山本
 士 56 宗休 邸 渡邊

士 57 元真 邸 羽山
 士 58 西海 邸 小山
 士 59 藤五郎 兵 品川
 士 60 軍七 高井信保^{ノブヤス}
 士 61 俊太郎 松岡貫通^{ツラミチ}
 士 62 孫一 校 小幡
 士 63 政雄 藁科重禮^{シゲリ}
 士 64 兵馬 渡邊賢宗^{カモト}
 士 65 藤次 邸 松本
 森敏固^{トシカタ}

士66 隈造
士67 又六 佐竹規正ノリマサ
士68 淨 太洞保高ヤスタカ
士69 槻隈 邸 石川
士70 傳八郎 萩原蕃宣
士71 平次郎 矢野正脩マサナガ
士72 幹 校 中西
士73 弥覺
士74 勘十郎 青山成時シゲトキ
士75 幹造 那須靖位ヤスタカ

士76 精橘 邸 鈴木
士77 周七 中村
士78 真十郎 松場敬典ヨシノリ
士79 市馬 岩橋信武ノリタケ
士80 轉 平池義政ヨシマサ
士81 庄太郎 多田登吉ノリヨシ
士82 正馬 邸 岩橋
士83 泰次 邸 山崎
士84 八次郎 志波
竹中元義モトヨシ

士 94 敬道 邸 木村
 士 93 一槻 邸 吉田
 士 92 致 邸 矢野
 士 91 申三郎 邸 寺嶋
 士 90 驪平 佐々木良光
 士 89 半平
 士 88 寿人 松崎義茂
 士 87 謙八 大嶋義信
 士 86 与七郎 濱田親房
 士 85 又作 曾羽友幸

士 103 省己 中衿充實
 士 102 数衛 小山田高重
 士 101 廣三郎 菅野忠次
 士 100 兵七 邸 奈尾
 士 99 又藏 内田孝義
 士 98 元益 校 田宮元美
 士 97 寿三郎 山崎正義
 士 96 三折 兵 原田
 士 95 仙庵 兵 石河
 兵 藤田

士 113 恭七
士 112 作造
士 111 藤市郎
士 110 仙次郎
士 109 兵次郎
士 108 新五郎
士 107 泉
士 106 虎藏
士 105 六郎
士 104 楠平

天笠
中山敬之 ヒロユキ
小山光憲 ミツノリ
戸口忠時 タケトキ
桑畑篤敬 アツヨシ
大淵敬之 ヨシユキ
奥田列吉 ノブヨシ
正木政義 マサヨシ
山崎紀治 ノリハル

士 122 (空白)
士 121 惇吾
士 120 源一
士 119 蘇二郎
士 118 国一郎
士 117 源太
士 116 三八
士 115 半藏
士 114 重一郎

山下高明 タカアキラ
邸 廣幡
飯嶋一徳 カツノリ
校 武田
榊睦吉 チカヨシ
上野吉光 ヨシミツ
榎木信則 ノブノリ
邸 吉田
岡本
松場尚章 ノラアキラ

士 132	士 131	士 130	士 129	士 128	士 127	士 126	士 125	士 124	士 123
実	九藏	清寿	儀平	佐次郎	久次郎	校 榮太郎	源二郎	文三郎	良比古
	柴田孝道 タカミチ	桂木信久 ノブヒサ	岩崎義為 ヨシタマ	兵 太田	市原義武 ヨシタケ	安井	安井重喜 シゲヨシ	谷輪義知 ヨシノリ	邸 平泰

士 141	士 140	士 139	士 138	士 137	士 136	士 135	士 134	士 133
昇一	校 房雄	校 千代楠	次三郎	勢	兵 立德	邸 九一郎	昌	仲記
向日昭武 アキタケ	山本	中嶋	下村敏古 トシフル	森政常 マサツネ	嶮山	内海	岡本	鎌田順勝 ケンシ

士 151 繁
 士 150 虎熊 校 宮井
 士 149 万寿八 箕嶋森永
 士 148 圓一 校 中衾
 士 147 次郎 邸 南
 士 146 勝三郎 久宗貞恒
 士 145 七九郎 万呂儀隆
 士 144 平八 深見喜之
 士 143 与平 真砂恭敬
 士 142 昇一郎 校 日置

士 160 喜間造 山本光重
 士 159 和雄 校 渡邊
 士 158 晴次 中澤
 士 157 軍次 堀 数久
 士 156 嘉七 愛須忠行
 士 155 寿次郎 泰房友章
 士 154 甚七郎 都筑時宣
 士 153 平三郎 平柳正明
 士 152 東一郎 邸 岡本
 澤 重明

士 170	士 169	士 168	士 167	士 166	士 165	士 164	士 163	士 162	士 161
力 忒	校 熊太郎	校 増種	兵 源八郎	校 安二郎	校 幾三郎	校 土井	校 五郎作	兵 新寄	校 造
	校 中嶋	校 泰地	兵 遠山	校 辻	校 巨海	校 土井	校 小出	兵 目良	校 田渕

卒 1 (空白)	卒	士 177	士 176	士 175	士 174	士 173	士 172	士 171
岩橋周二		兵 村上	兵 寿按	意和男	清庵	邸 尚敬	鉄蔵	性声
			榎本義惣太	長井真英	伊藤春人	邸 吉田	田中	校 永井
				マサヒデ	ハルヒト		裕 安列	
							ヤスツラ	

卒 2	葛枝	松房助政 スヘイサ
卒 3	善次	久木高時 タカトキ
卒 4	安主弥三	堀川重春 シゲハル
卒 5	彦平	生駒高信 タカフ
卒 6	長蔵	新谷清孝 キヨタカ
卒 7	奇数蔵	碓一之 カツノヲ
卒 8	潤造	池永
卒 9	辰五郎	嶋
卒 10	源五郎	嶋本
卒 11	清五郎	

卒 12	吉蔵	岩橋
卒 13	卯之助	大祇
卒 14	丹次	嶋
卒 15	涉	射場正義 マサヨシ
卒 16	梶郎	岩橋至盛 ヨシモリ
卒 17	甚蔵	榎本
卒 18	路一郎	鈴木
卒 19	一造	中村
卒 20	権十郎	芝泰止 ヤスマサ
		中西

卒 21	真人	岩橋
卒 22	通	新谷
卒 23	涉	瀧川忠澄 タカスミ
卒 24	久米	榎本信政 ノブマサ
卒 25	豊作	田中達著 ミチアキ
卒 26	羨次郎	中松
卒 27	浅次郎	玉井
卒 28	弥三郎	岩城清實 キヨサネ
卒 29	茂	林芳明 ヨシトモ
卒 30	亥類	脇田尚明 ナヲアキラ
卒 31	彦次	榎本維明 コレアキラ
卒 32	萬作	田中正徳 マサノリ
卒 33	庄造	中澤永兼 ナカカナ
卒 34	涼	榎本昌武 マサタケ
卒 35	門六	岩橋國昌 クニマサ
卒 36	藤五郎	小川
卒 37	新	辻本忠輝 タハテル
卒 38	状太郎	野口
卒 39	延七郎	二宮

卒 40 楠七郎

富田教秀
フジタノヒデアキ

卒 41 甚市

加藤

卒 42 藤次郎

山田

卒 43 岩藏

豊原善繁
ヨシノサキ

卒 44 梅三郎

芝崎久寿
ヒサヨシ

卒 45 諸方

小山義正
ヨシマサ

卒 46 寛吾

萩原政弘
マサヒロ

卒 47 萬藏

杵本利次
トシツク

卒 48 久米

小倉

卒 49 藤七

卒 50 実次郎

岩本吉秀
ヨシヒデア

鈴木暉房
テルフサ

卒 51 周藏

榎本包信
カネノブ

卒 52 常次郎

植太

卒 53 秀次郎

有本

卒 54 類次

左向光郷
ミツザト

卒 55 豊五郎

管谷治義
ハルヨシ

卒 56 甚三郎

高峯延行
ノブユキ

卒 57 尚次

堀清春
キヨハル

卒 58 慶次郎

坂田

卒 59 徳市

小野田

卒 60 新七

濱田光省
ミツアキラ

卒 61 清吉

笠泰

卒 62 徳蔵

木村則徳

卒 63 修一郎

中田

卒 64 樟蔵

岩橋宗正
ムネマサ

卒 65 将平

花山

卒 66 利作

泰地忠親
タケチカ

卒 67 為蔵

鈴木義政
ヨシマサ

卒 68 吉太郎

卒 69 喜蔵

木村

卒 70 長次郎

藤井

卒 71 政蔵

辻

卒 72 義四郎

下村

卒 73 廣一

相野

卒 74 駒三郎

山本

卒 75 良太郎

岩橋

卒 76 熊楠

山本

卒 77 源次

加納義秀
ヨシヒデ

卒 78 源次

川合義泰
ヨシユキ

卒 78 延吉

田嶋

卒 79 春耕

和田

卒 80 槌三郎

岩橋完行
サタユキ

卒 81 国平

佐々木路知
ミチチカ

卒 82 嘉十郎

小谷義光
ヨシミツ

卒 83 栄七

三川豊兼
トヨカナ

卒 84 誠一

中泰

卒 85 幸吉郎

笠原

卒 86 圓蔵

山際

卒 87 善四郎

卒 88 惣次郎

中嶋

卒 89 権次郎
田野正吉
マサヨシ

卒 89 権次郎

卒 90 与八
木下

卒 90 与八
桐本信基
ノワモト

卒 91 善三郎
平峯為政
タメマサ

卒 91 善三郎
平峯為政
タメマサ

卒 92 (空白)
谷地正光
マサミツ

卒 92 (空白)
谷地正光
マサミツ

卒 93 弥平次
山田

卒 93 弥平次

卒 94 嘉蔵

卒 94 嘉蔵

卒 95 源蔵
芝

卒 95 源蔵
桂木継久
ツクヒサ

卒 96 梅吉
桂木継久
ツクヒサ

卒 96 梅吉

卒 96 梅吉
寺本

卒 106	卒 105	卒 104	卒 103	卒 102	卒 101	卒 100	卒 99	卒 98	卒 97
嘉八	藤楠	常八	常吉	長八	溜	布平	善藏	永守	八百八
	村井	加藤	和田	津秦	池本	吉村 美信 ^{ヨシノブ}	布施谷	田野	梅田 義廣 ^{ヨシヒロ}

	卒 115	卒 114	卒 113	卒 112	卒 111	卒 110	卒 109	卒 108	卒 107
	林平	専平	楠一	新八	喜三郎	嘉平	庄三郎	良太郎	栄藏
笠原	梶本	内田	下和佐 勝之 ^{カツユキ}	小川 喜則 ^{ヨシノリ}	平松	寺本	木村	田野	岡本 安豊 ^{ヤストヨ}

卒 125	卒 124	卒 123	卒 122	卒 121	卒 120	卒 119	卒 118	卒 117	卒 116
保橘	儀八	久四郎	仁平	清七	芳太郎	辰次郎	駒橘	仙蔵	民治
	武田義盛 ヨシモリ	岩崎久次 ヒサツグ	糸川秀重 ヒデシゲ	庄司	小松	北川	吉田光國 ミツクニ	山本寿光 トシミツ	奥村

卒 134	卒 133	卒 132	卒 131	卒 130	卒 129	卒 128	卒 127	卒 126	
政吉	増次	承七	惣太郎	幾二	圓七	惣平	平四郎	長七	
笠松	武田保與 ヤスラキ	楠本芳豊 ヨシトヨ	加藤	川合一布 カッタカ	山田	武田家貞 イエサタ	糸川義一 ヨシカツ	柏木重春 シゲハル	崎山正乗 マサノリ

卒
135
長重郎

岩橋政秀 マサヒデ

卒
136
八十吉

小林

卒
137
伊三郎

豊原定吉

卒
138
茂平

宇治田英信 ツネサダ

卒
139
庄吉

近藤

卒
140
源吉

古井英秋 ヒデアキ

卒
141
彦平

藤村豊明 トヨアキラ

卒
142
甚平

寺尾義奥ヨシヲキ

卒
143
嘉次平

三栖言智トキトモ

卒
144
政平

卒
145
すけ蔵

鳥井說宴

卒
146
清七

寺井清通キヨミチ

卒
147
茂七

枚原正勝 マサカツ

卒
148
勝平

カネアキラ
撫養兼明

卒
149
逸平

小畑利政

卒
150
沢平

寺井弘行 ヒロユキ

卒
151
林平

玉置直義ナラヨシ

卒
152
勘
蔵

サタキヨ
枚下定清

卒
153
常吉

長瀬宗清 ムネキヨ

小倉

卒 160	卒 159	卒 158	卒 157	卒 156	卒 155	卒 154
(空白)	(空白)	(空白)	(空白)	松次郎	利平	竹二
内田楠一	山田辰次郎	武田岩吉	溝腰 酒	石川	坂本	木村